学位論文の要約

ハンナ・アーレントとニューヨーク知識人の知的交流史

大形　綾

本研究は、従来ドイツ哲学およびヨーロッパ的教養といった側面から検討されてきたアーレント思想の解釈に対する批判として、アメリカのユダヤ系知識人グループであるニューヨーク知識人に着目し、戦後アメリカ社会の経済的・文化的繁栄とそれに伴う冷戦の深化、および人種問題の観点から、両者の思想的影響関係を解明したものである。ニューヨーク知識人とは、大半が東欧系ユダヤ人移民の子孫であり、30 年代から 60 年代にかけてアメリカで活躍した左翼知識人集団のことである。本研究の目的は、両者の公的・私的交友関係を一次史料を用いて再構成するとともに、両者の交流の検証を通じて、アーレント思想におけるアメリカ社会のインパクトを考察することにある。第 1 章と第 2 章では両者の接近を、第 3 章と第 4 章では両者の対立を検討した。

序章では、研究目的や達成すべき成果を明示した後、アーレント研究史を概観した。1970 年代から 2010 年代に至るアーレント研究史の潮流を振り返る中で、未だ解明されていない課題として、アーレントとアメリカ社会の結びつきという論点が存在することを提示し、本研究がこの問いに対していかに有効な視座をもたらしうるかを明記した。

第 1 章では、ニューヨーク知識人がアーレントから受けた思想上の影響を考察するために、戦中から冷戦初期にいたるアメリカの政治的・社会的状況を考察した。まずは、第二次大戦をめぐり、両者が政治的にどれほどかけ離れていたのかを検討した。アーレントは亡命直後から 40 年代にかけて三つの役割をアメリカで担ったが、ここから、彼女が日々移り変わる戦争の情勢に強い関心を示していたことが判明した（第 1 節）。一方、30 年代に左翼の文芸批評家として活動を始めたニューヨーク知識人は、第二次大戦にさほど関心を払わず、それを対岸の火事だと見なしていた（第 2 節）。第二次大戦を巡っては差異の目立つ両者の関係は、しかしながら、50 年代には一転して急速な接近を遂げている。本章は、その変遷の要因を 2 つの観点から考察した。第一に、『全体主義の起原』初版（1951）の最終章「結びのことば」を検討する中で、アーレントがソ連の収容所に対して国際的に働きかけるよう主張していたことを確認した（第 3 節）。次に、戦後に掲げられたニューヨーク知識人の「冷戦リベラリズム」という政治姿勢を分析し、それが部分的にはアーレントの呼びかけに呼応するものであったことを明らかにした（第 4 節）。

第 2 章では、アーレントがニューヨーク知識人から受けた思想上の影響を考察するために、ドイツとアメリカの知識人による大衆文化論を取り上げた。その際、アーレントの雑誌投稿論文「文化の危機」に着目し、それが知識人の大衆文化論に対するアーレントなりの回答であった、という新たな解釈を示した。まずは、「文化の危機」の内容を振り返り、それが「社会と文化」と題されたアメリカ講演草稿と「文化と政治」と題されたドイツ講演草稿

を基にした論文であることを確認した（第 1 節）。続いて、30 年代から 50 年代の間に提出された、ドイツ系知識人のブロッホやアドルノ、アメリカ系知識人のグリーンバーグやローゼンバーグ、マクドナルドらの大衆文化論を検討し、アーレントが彼らの議論に目を向けていたことを確認した（第 2 節）。最後に、メアリー・マッカーシーとの往復書簡の分析と、アーレントの文化論に関わるインタビューでの発言を考察する中で、「文化の危機」にはアメリカの知識人、とりわけニューヨーク知識人に対する批判的視座が盛り込まれていたことを明らかにした（第 3 節）。

第 3 章では、アーレントとニューヨーク知識人の間で生じた最初の論争として、アフリカ系アメリカ人の人種問題と公民権運動をめぐる論争を取り上げた。まず初めに、1957 年に生じたリトルロック事件とそれに対するアーレントの論文「リトルロックに関する省察」が、これまでどのように解釈されてきたかを確認した（第 1 節）。続いて、彼女が最初に論文を寄稿したにも関わらず、掲載を拒否した雑誌『コメンタリー』編集者の回顧録を手掛かりに、アーレントの論文がニューヨーク知識人にいかなる波紋を投げかけたかを検討した（第 2 節）。その後、なぜアーレントが人種差別的と評される論文を執筆するに至ったのかを考察し、その問いに答えるために、彼女が目にしたリトルロック事件の記事と写真の特定を行った（第 3 節）。最後に、アーレントが批判者の中で唯一譲歩したアフリカ系アメリカ人の知識人であり、ニューヨーク知識人の一人でもあったラルフ・エリスンとの往復書簡を分析しながら、彼女がこの論争から何を学んだのかを明らかにした（第 4 節）。

第 4 章では、アーレントとニューヨーク知識人の間で生じた二度目の、そして最後の論争として、ユダヤ人問題を取り上げた。具体的には、『エルサレムのアイヒマン』が引き起こした論争を中心に、アーレントとニューヨーク知識人がこの論争を経る過程で決裂に導かれた原因を分析した。ここではまず、『エルサレムのアイヒマン』の内容を確認し、当時の知識人たちからどのような批判が提出されていたのかを概観した（第 1 節）。次に、『エルサレムのアイヒマン』をめぐってニューヨーク知識人内で行われた議論を、公開討論会と誌上討論の議論を基に分析した（第 2 節）。さらには、雑誌『ニューヨーカー』に対するニューヨーク知識人の確執にも注目し、激しい批判が生じた要因の一つに、記事の掲載場所に対するニューヨーク知識人の嫌悪感があったことを確認した（第 3 節）。最後に、アーレントが『ニューヨーカー』に発表した論文「真理と政治」を考察する過程で、論争によってアーレントがニューヨーク知識人と絶縁したことを確認するとともに、これを機に彼女が思想史上どこにも位置付けられることのない「パーリア」となったことを明らかにした（第 4 章）。

最終章では、アイヒマン論争後のアーレントとニューヨーク知識人の関係を、両者の間で交わされた往復書簡から跡付けた。さらには、60 年代以後のアーレントとニューヨーク知識人の歩みにも言及しながら、改めて本研究の意義、目的、意図の振り返りを行った（おわりに）。

以上の考察を通じて、次の成果が得られた。まず、従来は『全体主義の起原』で出会い『エルサレムのアイヒマン』で決別した、ということしか分かっていなかったアーレントとニュ

ーヨーク知識人の交流について、より詳細な両者の結びつきと対立関係を明らかにすることができた。具体的には、アーレントは文化論をめぐってニューヨーク知識人から影響を受け（第２章)、アフリカ系アメリカ人をめぐって両者は最初の論争を経験した（第３章)、ということである。次に、アーレントのアメリカ理解はニューヨーク知識人の言説に影響されている側面があり、そこには彼女のアメリカ型共和主義への理念をより深く理解するための手がかりが隠されていることが判明した（第３章)。さらには、本研究全体を通じて、アーレントとニューヨーク知識人の交流関係がつまびらかにされたことで、戦後アメリカ社会で活躍した東欧系・ドイツ系ユダヤ人の交流という特殊な事例を提示することができた。この成果は、アーレント研究やニューヨーク知識人研究だけでなく、アメリカ史研究やユダヤ文化史研究といった、より大きな枠組みの研究に対しても重要な意義を有していると思われる。